

環境的視点からの経済学批判について

原 田 実

目次

はじめに

- 1 ハンス・イムラーの「労働価値説」批判について
- 2 中村修氏の経済学批判について
 - (1) 生産の概念について
 - (2) 投入エネルギーと産出エネルギーの比較について
 - (3) リカードは「無限の商品を前提」したという見解について
 - (4) 「スミスからリカードへの自然観の変化」について
 - (5) 「生産的労働と不生産的労働」について
 - (6) 貨幣は「人間の道具」か
 - (7) マルクス批判について

おわりに

はじめに

「ローマ・クラブ」が『成長の限界』という報告書を発表してから今年で45年が経過する。この報告は、このまま成長が続けば資源の枯渇や環境の悪化によって100年以内に重大な危機に直面することを訴えたものである。しかし、この警告にもかかわらずその後も経済成長は加速度的に進行し、地球の温暖化、熱帯雨林の破壊、海洋、河川の汚染、等々地球環境はますます深刻な状況になってきている。2007年2月に発表された IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第4次評価報告書は、過去100年間に地球の平均気温が前回の予想を上回り、 0.74°C 上昇したことを指摘し、温暖化の進行が加速していることを明らかにしている。温暖化はハリケーンや台風の発生の増大、その勢力の増加、砂漠化の促進、海面の上昇等々、大きな被害をもたらす。IPCC のパチャウリ議長は「仮

に今すぐ温暖化ガスの排出量を2000年水準に抑えても、気温は10年ごとに0.1度上がり、海面は数世紀にわたって上がり続ける。」(日経新聞 '07.3.31) という。

このように経済成長によって地球に危機的状況がもたらされているにもかかわらず、すでに十分に豊かさを享受している国も毎年目標とする経済成長率を掲げその達成に全力をあげる。どの企業も成長を競い合い、そして成長率の高い企業ほど優秀な企業として高く評価される。環境問題の重要性を説くマスメディアも、成長率が少しでも鈍るとこれを深刻な問題として報じる。経済学の各派も成長理論を競い合い、インフレターゲット論や構造改革などの成長政策を提起し、自分たちの政策こそがより高い成長を実現するものであると誇示する。われわれはまだまだ貧しいのであり、もっと大量に富を生産し消費しなければならない、というわけである。地球環境がどんなに悪化しようが経済成長は相変わらず最優先事項なのである。したがって、もっぱら成長を追求する経済学に対して環境の視点から根本的な疑念が提起されるのも当然である。

近年こうした視点から、最も根源的な経済学批判を試みたものとしてハンス・イムラーの著作『経済学は自然をどうとらえてきたか』(Immler, Hans *Natur in der ökonomischen Theorie*)と中村修氏の著作『なぜ経済学は自然を無限ととらえたか』を挙げることができる。イムラーの著作はアリストテレスから、ロック、スミス、リカード、マルクスに至るまでの経済学説を検討した、原典で450頁、日本語訳にして570頁に達する大著である。イムラーは今日人間の労働が巨大な規模で自然を破壊していく現実を見て、この原因を人間の労働にのみ価値の形成を認め、自然には何らの価値も認めない「労働価値説」に求めるのである。彼は経済学説が現実の経済的諸関係の反映であるということが理解できず、逆に現実の諸関係が学説の反映であると考えてるのである。イムラーの主張はこの単純な誤りの上に築かれているのであって、この誤りが誤りとして証明されるならばこの大著は一挙に崩壊することになるのである。

中村氏の著作は、そのタイトルからも推察されるように、イムラーの強い影響のもとに書かれたものであり、上に指摘したイムラーと同じ誤りを共有している。氏の著作の主要内容は、自然の資源は有限であり、したがって経済成長を無限に続けることはできないということ、しかし経済学は無限の自然を前提しており、無限に成長が可能であると信じている、というものである。そして、そういう代表的な経済学者としてリカードやマルクスが取り上げられている。筆者は、先進国においては、これ以上経済成長を追求する必要はないと考えており、この点でイムラーや中村氏の主張に基本的に賛成である。経済学は成長なしに、失業や貧困の解決の方法を検討すべきである。筆者は、地球

環境の破壊の元凶は、生産がもっぱら金儲けのために行われる資本主義的な生産のシステムにあると考える。資本はより多くの利潤を目指して、絶えず成長を推し進めざるをえない存在なのである。

資本主義的な生産のシステムを永遠に合理的なシステムとして賞揚するのが、市場原理主義の経済学である。今日、資本の要求にしたがって成長至上主義を唱えているのは、この経済学にはかならない。近年アメリカ産のこの経済学が跋扈し、成長の妨げになるとしてこれまで労働者や小経営者を保護していた規制が撤廃あるいは緩和され、これによって多くの非正規労働者やワーキングプアが生みだされてきたのは周知のとおりである。また市場原理主義の経済学は、自由貿易は各国を比較優位な生産物に特化させ、それによって経済成長がより促進されると主張してきたのであるが、自由貿易の採用は、日本においてはまさしくそのとおりに進行し、比較劣位にあるわが国の農業や林業は大きな打撃を受けてきたのである。食料自給率は40%を切り深刻な問題になっているが、木材自給率はさらに深刻で、この森林国において、わずか18%しかないのである。市場原理主義者はまた、自由貿易は自動的に資源の最適配分を実現すると言う。彼らにしたがえば、農業や林業従事者から仕事を取り上げ、農地や山林を荒れるにまかせても、資源の最適配分なのである。日本が目指すべきは農業、工業、漁業、林業の均衡の取れた経済であり、これこそ資源の最適配分であろう。このままでは、わが国の山村は近い将来消失してしまうであろう。わが国で自給可能な農産物や木材を海外からの輸入に依存することは資源やエネルギーの浪費であり、環境に大きなマイナスである。

日本の経済政策を決定する中枢は、アメリカのそれと同じく市場原理主義者によって占められているのであり、したがって、環境の立場から経済学を批判するのであれば、市場原理主義＝成長至上主義の経済学こそ批判されなければならないのである。ところが、イムラーや中村氏の経済学批判は、市場原理主義を主要なターゲットとするものではなく、スミス、リカード、マルクスに批判の矛先を向けるのである。いずれの批判も荒唐無稽なものでしかないが、しかし珍しい主張が出てくるとそれに影響される者も少なくないのである。

1 ハンス・イムラーの「労働価値説」批判について

イムラーは「労働価値説」が価値形成における自然の役割を無視してきたと批判するのであるが、彼はその典型例をリカードとマルクスに見出す。ここでは、リカードの価値理論についての彼の批判を見ていくことにしよう。以下いささか長くなるが正確を期

すため煩を厭わずその主要な点を引用しよう。

「リカードウの労働価値論における価値—自然—問題を二つの場合について例証することにしよう。

第一の場合は、自然の生産力が高まったという前提から出発しよう。このような場合の事例としては多くのものを挙げるができる。すなわち、高い肥沃度、豊かな原料、改良された技術的・自然的生産方式等々。生産性の上昇は、仮にその『発見』のためにはあらかじめ労働が必要であったとしても、いまやその原因が自然要素のみに帰せられるべきであるということが、このすべての場合にあっては依然として重要なことである。自然的生産力の上昇によって同じ労働時間でより大量の生産物が生産される。リカードウの価値体系においては、これは商品の価値が低下し、労働の生産性が上昇するということの意味する。つまりリカードウは生産性の上昇とそれによって引き起こされる価値の低下を労働の改良された生産力に帰するのである。

第二の場合は、自然の生産力が低下するということが想定される。このような場合の事例としても多くのものがある。すなわち、自然の資源が枯渇する。原料等が希少になる。自然の富の『生産的』破壊が進む、土地、水、大気に存在している自然の源泉が持っている物をつくり出す力が衰えてゆく等々。いまでは同じ労働時間内に生産される生産物量は少なくなる。リカードウの価値体系においては、商品の価値は増大し、労働の生産性は低下する。だが、彼の体系においては、価値関係におけるこの変化は労働の領域からのみ説明される。リカードウの価値理論から引き出される結果は、自然の負荷に関する逆説的な悪しき循環である。すなわち、まったくその低下が認識されていない自然の生産性が低下すれば低下するほど、商品の価値はますます増大するように見える。というのは、同量の生産物を得るためにはより多くの労働時間が調達されねばならないからである。自然の生産諸力の水準の低下は交換価値の増大として表れ、労働の生産性の低下として表れる。他方、自然の生産諸力がますます強力に、かつより大量に利用し尽くされることによって、まさに労働の生産性は高められうる。けだしこの場合にも同じ労働時間内により多くの生産物が生産されるからである。結論的に言うと、リカードウの価値理論は自然とその生産諸力に対して倒錯した論理を提示する。すなわち、自然の直接的、破壊的占有は労働の生産性の増大、交換価値の減少として確認され、それによって引き起こされた全般的な自然の生産性の水準の低下は、総じてそのようなものとしては知覚されないのである。このことから引き出される結果は、同量の生産物を得るためにいまではより多くの労働時間が使用されねばならず、したがって、まず自然の生産諸

力の量的水準が押し下げられ、それに比例して交換価値が増大するということである。リカードウの価値理論は必然的に次のような結果へと至る。すなわち、すべての生産者にとって自然の直接的、破壊的占有の経済的目的は労働の生産性増大を目的としていること、だが、価値思考の中では、この自然破壊の結果は表向きは重要なことではないこと、次の生産期間において自然の生産諸力が低下するならば、生産物の価値は増大するということ、これがその結果である。

この価値思考は生産の総過程において、およそ次のような三つのことを予告する。すなわち、第一に、自然的生産諸力の体系だった搾取に対して個々の生産者たちにはその報酬が与えられる。第二に、自然破壊を価値的に表現する方法はないのであるから、このような自然破壊は社会的な規範に照らして個々の生産者たちにとっては重要なことではない。第三に、それ以後いっさいの生産において交換価値は高められたものとして表れる。換言すれば生産者たちが交換価値に関して合理的に行動すればするほど、彼らはますます多くの自然的な生産諸力を消費する。彼らが自然的な生産諸力を多く消費すればするほど、新たにつくり出される生産物の個別価値はますます大きくなる。価値理論的な労働時間計算は、自然は恒常的であるという想定のために、物象的生产と価値生産の関係を異常なものにする。社会的に規定され、調整され、制御される価値計算においては、社会の物象的・自然的な貧困の増大は個々の生産物の価値の絶えざる増大として表れるのである。価値と自然生産物の関係のこのような倒錯に関して決定的なことは、この倒錯は間違い、あるいは謬見にもとづくものではなくて、厳密な価値理論の論理にもとづくものであるということである。』⁽¹⁾

見られるように難解であり、理解に苦しむ箇所も多くあるのであるが、言いたいことはおよそ次のようなことではないかと思われる。言うまでもなく、人間は生産において自然素材や自然諸力を利用しなければならない。しかし、自然破壊が進めば自然素材や自然諸力も劣化する。したがって、例えば、自然破壊、環境破壊によって水が汚染され、その浄化に多大の費用を要し、それによって水の価値が増大するならば、「労働価値説」にしたがえば、労働の生産性が低下し、そのために水の価値が増大したと考える。しかし、イムラーによれば、これは自然破壊による「自然の生産性の低下」、言い換えれば「自然の価値低下」⁽²⁾でしかないのにリカードの「価値思考」では「自然破壊を価値的に表現する方法はないのであるから、このような自然破壊は社会的な規範に照らして個々の生産者たちにとって重要なことではない。」ということになる。つまり「自然は価値を有しないものと想定しているために、自然の破壊が自然の価値低下として表出される方法

はまったく存在しない。」というわけである。したがって、自然破壊による「社会の物象的・自然的な貧困の増大は（自然の価値低下としてではなく——原田）個々の生産物の価値の絶えざる増大として表れる」という「倒錯」した現象が生じてくるということになる。しかし、「価値思考」を変えて手つかずの自然素材も価値をもつのだ、「自然的生産力」も価値を形成するのだと考えれば、「自然の全体が交換価値計算から抜け落ちる」⁽³⁾ことはなくなり、自然破壊も「自然の価値低下」として「交換価値計算」の中に組み込まれるというわけである。こうして彼は、「リカードウの価値学説が自然に敵対するものであることが認識される。」⁽⁴⁾という結論に到達するのである。

イムラーの思考方法は逆立ちしている。彼は商品の価値が労働によって決まるということが、「労働価値説」に基づいて成立したかのように考えている。次の文章はそれを裏付けるであろう。「いったい、経済的価値には確固たる普遍的に妥当する定義がありうるのだろうか、あるいは価値は、一つの社会の中でその時々¹に歴史的に得られた合意(historisch gewonnen Übereinkunft)に基づくものではないのか、と。……(中略)……。したがって、客観的価値は原則的にはたんに社会的慣習(gesellschaftliche Konventionen)としてのみ存在しうる。社会とその構造変化とともに、その社会のそのときどきの価値体系も変化する。このことは経済価値にも当然妥当する。」⁽⁵⁾彼にとっては、商品価値は「歴史的に得られた合意」、あるいは「社会的慣習」によって形成されるのである。したがって、「労働価値説」も一つの「歴史的に得られた合意」、「社会的慣習」に他ならず、その「合意」、「慣習」にしたがって現実の商品価値が形成されるというわけである。

労働が商品の価値という形態をとり、労働時間が商品の価値量として表されるのは生産関係、すなわち私的所有と社会的分業に起因しているのである。この生産関係の下では、労働の生産物は商品形態をとらざるをえず、生産に要した労働量は商品の価値量として表現されざるをえないのである。「労働価値説」は、このような現実の諸関係の反映にほかならない。万有引力の法則がニュートンの発見によって存在するようになったのではないのと同様、労働が商品の価値として対象化するのも「労働価値説」によってそうなるわけではないのである。ところが、イムラーはこれを転倒して理解し、労働によって自然が切り取られ自然破壊、環境破壊が進行している現実を目の当たりにし、労働のみ価値形成を認め自然の価値を認めない「労働価値説」を「自然に敵対するものである」と論難するのである。彼は、次のように述べる。

「すなわち、¹一方では、この自然の全体が交換価値計算から抜け落ちる。この自然の物象的富の増大や破壊は価値に関してはまったくどうでもよいままに捨て置かれる。私

的に所有されていない水域に生息している魚の数が多いか少ないかということは交換価値にとっては重大なことではない。水や大気の汚染は、これらが私的に所有されていない限りでは、価値の損失として気づかれることはない。放射能汚染は災難ではあろうが、交換価値計算を基礎とする国民経済的な価値計算においては、それは商品形態を取らない自然の全領域に対する重大事ではない。さらにまた、すべての植物種や動物種の絶滅も価値経済に影響を及ぼすことではない。換言すれば、交換価値計算においては、商品形態を取らない自然の破壊は起こりえないのである。なぜならば、まったく存在していない価値は破壊されることもありえないからである。』⁽⁶⁾

ここに書かれていることはそれ自体としてはほぼ正しい指摘であり、資本主義的生産の矛盾を衝いている。しかし、彼はこれを「労働価値説」の矛盾として、したがってそのような「合意」、「社会的慣習」を形成するのに関与したスミスやリカードやマルクスの責任として批判するのである。労働による価値規定という「社会的慣習」をやめて、自然にも価値を認めるような「社会的慣習」を確立すれば、「商品形態を取らない自然」も「価値」をもつことになり、したがって自然破壊も「価値破壊」として認められ、自然破壊の進行も抑制されるであろうというわけである。イムラーはスミス、リカード、マルクスが「価値形成への自然の関与を排除してしまった」⁽⁷⁾と延々非難されるのであるが、ならば、イムラーは如何なる自然が如何にして価値を形成するのか、また自然のどれぐらいがどれぐらいの価値量となって表れてくるのかを説明すべきであろう。この点については一言の説明もないのである。価値とは生産において人間が投じた費用がとる独自の社会的形態であるから、自然が価値形成に関与することなどありえないのである。⁽⁸⁾

イムラー批判を閉じるにあたって最後にイムラーのために一言しておけば、イムラーは「労働価値説」の「誤謬」を「交換価値経済 (Tauschwert-Öconomie) が犯している大きな誤謬」⁽⁹⁾として、すなわちそれが自然に敵対的であるということを、現実の「交換価値経済」に即して指摘している箇所も多くあるので、その点では「交換価値経済」がいかに自然に敵対的であるかを指摘した書として読むことができるし、示唆に富む見解も少なくない。

(1) ハンス・イムラー『経済学は自然をどうとらえてきたか』(栗山純 訳、農文協)

1993年 241—242頁

(2) (3) (4) 同上 249頁

(5) 同上 8 頁

(6) 同上 191 頁

(7) 同上 249 頁

(8) イムラーの転倒した理解に影響されて「労働価値説」批判を行っているのが中村氏である。氏は次のように述べる。「経済学において(自然を無視して)人間の労働だけを評価してきたのが労働価値説であった。その対極にあるものとしてフィジオクラート(日本では重農学派とよばれている)の自然価値学説を紹介することができる。」(中村修『なぜ経済学は自然を無限ととらえたか』日本経済評論社 1995年 231頁)中村氏も労働生産物のみが価値をもち自然が価値をもたないのは、あるいは自然が価値の形成に参加しないのは「労働価値説」のせいだ、と考えているのである。

内山氏もイムラーの著作の「解説」において次のように述べる。「確かに労働価値説は、価値形成の根拠を労働(時間)のみに求めることによって、価値生産における自然の役割を無視している。自然は労働のための前提として取り扱われ、自然自身も持っている『生産能力』についても、生産によって自然がいかになら変わっていくのかも考慮されない。イムラーは、この自然の見落としが、自然を搾取の対象にし、生産活動によって自然が破壊されていくことに無関心な経済学を、作りだしたのではないかと考える。」(内山節「解説——具体的自然・具体的労働に踏み込む『未来の経済学』」ハンス・イムラー前掲書579頁)

人間の労働が価値を形成し、そしてできる限り大きい価値が生産の目的となるからこそ自然破壊が生じるのに、氏は「価値生産における自然の役割を無視」するところからそれが生じると考えるのである。内山氏は、イムラーと共に「価値生産における自然の役割」を説明する義務を負っている。

相沢氏もイムラーと同様の考えを次のように述べる。「これ(農業においては自然も労働するということ——原田)は人間の労働だけが価値を生み出すという労働価値説に反するものであって、のちにリカードの反論にあうが、生産のかなりの部分を自然に依存する農業にまで労働価値説を適用したところに経済学の誤りがあったのではなかろうか。」(相沢幸悦『反市場原理主義の経済学』日本評論社 2006年 20頁)つまり、「労働価値説」の工業生産物への「適用」は正しいが、農業生産物への「適用」は「誤り」であるというわけである。氏にしたがえば、労働が商品の価値として対象化するのには「労働価値説の適用」によるものであるというわけである。「労働価値説の適用」という考え方、これはイムラー、中村氏、内山氏にも共通であり、彼らの思考方法の特徴を表現し

ている。これにしたがえば、地球が太陽の周りを公転するのも「地動説の適用」によるものであるということになる。

(9) イムラー 前掲書 196頁

2 中村修氏の経済学批判について

(1) 生産の概念について

氏は、経済学が「生産」と呼んでいるものを次のように批判する。

「われわれが経済的に『生産』とみなしていることを注意深く観察すれば、それが単なる地球の資源の『加工』にすぎないで物質的・エネルギー的には何も生みださず、『消費』しかしていないことに容易に気づくことができる。例えば、多くの工業生産の場合、また近代化された農業の場合、そこでは経済的な価値は増加し『生産』されているのだが、その経済的『生産』のために自然のストック（資源、化石燃料）が消費されている、という奇妙な現象が起こっている。

『奇妙な』というのは、われわれは自然を消費しているにもかかわらず、それを生産という言葉で表現しているからだ。

われわれが親の莫大な遺産を引き継いだと仮定する。その遺産はいくら莫大でも限界があるから、使えば使うほど減少していくだろう。それゆえわれわれは、その遺産を消費することを、けっして生産などとは言わない。

ところが、この遺産が地球規模の石油や資源になると、われわれは、石油や資源を消費して商品に加工することを生産とよぶようになる。自然を消費しているにもかかわらず、それを経済的には生産と認識している。」⁽¹⁾

なるほど、親の「遺産を消費することをけっして生産などとは言わない。」経済学が石油の生産などと呼んでいることも、地球規模の遺産を消費していることではないか、と。氏はこの一言によって、おそらく前人未知の大発見をされたかのごとく得意満面になって、経済学に痛烈な一撃を与えたと考えたであろう。しかし残念ながら、氏は生産も消費の一つの形態であるということをご存知ないようである。どんな生産であれ——といってもここでは物質的な生産だけに限定しているが——、労働力や機械や道具、原料などの生産手段が消費されるということは論を俟たないであろう。例えば日本酒の生産においては、米や麴が原料として消費される。つまり、米や麴が生産的に消費されているのである。しかし、このことをもってこれは酒の生産と言うべきではなく、米や麴の消費と言うべきである、などと主張する者は氏以外にはいないであろう。

人間は無から有を生み出すことはできない。生産とは、人間が人間の外にある自然素材に働きかけ、それを人間に有用な対象に変えること、つまり、形態変化のことである。人間が働きかける対象が石油や石炭のような有限な対象であろうが、米のように増大しうる対象であろうが、このことによって生産の概念が変更されることはない。米を消費して酒を作ることが生産であるならば、石油を消費して化学物質を作ることも立派に生産である。氏はまた、「自然のストック（資源、化石燃料）」を消費することを、「自然の消費」と述べているが、これも問題である。野生のバナナをもぎって食べれば、それは「自然の消費」と言えるであろうが、しかしこうしたことは、今日では例外的にしか存在しない。自然は、そのままの姿では、人間が消費しうる状態にはないのである。地中にある石油を直接に消費する方法は、残念ながらまだ発明されていない。それを汲み上げ、精製して、言い換えれば、労働生産物の形態において、はじめて消費可能になるのである。

（２） 投入エネルギーと産出エネルギーの比較について

氏は、「生産と消費の逆転」という見出しをつけた箇所ですら次のように述べられている。

「宇田川、およびその後の計算によれば、1950年の水稻のエネルギー産出投入費は1.5であったが、90年は0.2を下回っている。それは、10のエネルギー（労働、および化石燃料）を投入してわずか2のエネルギー（米）を回収しているという意味である。つまり、日本の稲作ではエネルギーは生産されず、消費だけがおこなわれている。

生産したエネルギー以上にエネルギーを消費することは、それは生産ではなく、消費と考えるのが妥当である。」⁽²⁾

ここでも、生産の概念についての氏の理解の欠陥が現れている。氏は、投入されたエネルギーと産出されたエネルギーが質的に異なったものであるということを理解されていない。投入されるエネルギーは、「労働、および化石燃料」の形態で投入されるのであり、産出されるエネルギーは米の形態で産出されるのである。投入されるエネルギーは、食料の形態をとっていない。そのエネルギーは、そのままの形態では、人間の生命を維持・再生産することはできないのである。だからこそ、それらが米の形態に変化されなければならないのである。エネルギーといっても、投入されるエネルギーと産出されるエネルギーは質的に異なったエネルギーであり、したがって、それらを同じエネルギーとして量的に比較することはまったくのナンセンスである。量的比較は質的な同一性を前提するのである。投入されるエネルギーと産出されるエネルギーが質的に同じなら、

「生産したエネルギー以上にエネルギーを消費する」というばかげたことを人間はするはずはないのである。

投入エネルギーと産出されたエネルギーの比較で、生産か消費を区分するならば、いかなるエネルギーも産出しない生産部門もいっぱいあるから、それらの部門においては、生産は行なわれていないということになる。氏は、「農業の場合、エネルギー効率が低下したといっても、農地ではエネルギーが生産されていた。しかし、工業の場合は化石燃料や地球の資源の加工にすぎず、具体的には何もエネルギーを生みだしていない。消費だけがおこなわれている。」⁽³⁾と述べていられるから、農業以外の部門では生産はおこなわれていないことになる。しかし、農業部門でも、綿花、麻、たばこ、ゴム、蘭草、桑等の生産はいかなるエネルギーも産出しないから、農業でも「消費だけがおこなわれている」分野があるということになる。また、小麦、米、芋、大豆、果実などの食料も直接にそれを消費するばかりでなく加工して、たとえば、味噌、豆腐、醤油、酒類、パン、菓子等の形で消費する。しかし、加工は工業であるから、しかもこれらの分野はいずれも投入されるエネルギーの方が産出されるエネルギーより大きいから、ここでも「消費だけがおこなわれている」ということになる。投入エネルギーと産出エネルギーの比較で生産か消費かを区分するならば、氏の意に反して石油採掘こそ優れて生産ということになるであろう。ここでは産出エネルギーが投入エネルギーをはるかに上回っている。氏の生産についての経済学批判は、結局荒唐無稽な主張に帰着するのであり、見事な失敗に終わったのである。

(3) リカードは「無限の商品を前提」したという見解について

氏は、「地球環境の時代を迎えた現在では、地上の有限な自然のうえでは、商品もまた有限であることは共通の認識となっている。そこで、ここでは現代的な地球環境の視点からスミス、リカード、ミルの各々の自然観と経済理論の関係を論じる。」⁽⁴⁾として、まず、リカードについて彼が「無限の商品を前提に経済学を議論すると宣言した。」⁽⁵⁾と述べる。氏がその根拠としてあげているのは、リカードの次の文章である。

「諸商品は、それが効用を有するかぎり、その交換価値を二つの源泉からひき出す。すなわち諸商品の希少性からと、それらを取得するのに要する労働量からとである。

なかには、その価値がもっぱら希少性のみによって決定されるような商品がある。どんな労働も、このような財貨の分量を増加させることはできない。それゆえに、その価値が供給の増加によってひき下げられることはありえない。若干の珍しい彫像や絵画、

稀観書や古銭、その面積がきわめて限られた特別の土壌で栽培されるブドウから醸造されうるにすぎない、特殊品質のブドウ酒のようなものは、すべてこの種類に属する。これらの商品の価値は、それらを生産するのに当初必要とした労働量とはまったく無関係であって、それを所有したいと欲する人々の富と嗜好の変動とともに変動する。

しかしながら、これらの商品は、日々市場で取引される商品総量のきわめて小部分を占めているにすぎない。欲求の対象である財貨の最大部分は、労働によって取得されるのであって、それらの財貨は、もしわれわれがそれらを取得するのに必要な労働を投下する気になりさえすれば、一国においてばかりでなく、多くの国において、ほとんど無制限に（almost without assignable limit）増加することができるだろう。

そこで、商品について、その交換価値について、またその相対価格を左右する法則について論ずる場合は、われわれは、つねに人間の勤労のはたらきによって分量を増加させることができ、またその生産に際限なく競争がおこなわれるような、そのような商品のみを考えている。」⁽⁶⁾

見られるように、この文章は労働による価値規定が妥当するための条件について述べたものである。つまり、「人間の勤労のはたらきによって分量を増加させることができ、またその生産に際限なく競争がおこなわれるような、そのような商品」を条件とするということである。なるほど、リカードは「無制限に増加することができるだろう」とは述べているが、しかしこれは彼の経済学的前提にはなっていない。このことは通常の見解さえあれば誰にでも明かである。以上によってリカードは「無限の商品を前提に経済学を議論すると宣言した」という氏のリカード批判の「前提」が崩壊することになり、したがって以後のリカード批判は自動的に崩壊することになり、これ以上氏の見解を検討する必要はないわけであるが、しかし、紙幅に十分な余裕があるのでもう少し検討することにしよう。

上のリカードの見解を、氏は次のように批判される。「しかし、商品は人間の労働の産物であるだけでなく、そのまえに自然の産物である。いくら労働を投入しても有限の地上の自然からは有限の商品しか生産できない。有限の自然から無限の商品が生みだされることはない。これは、地球環境の時代の現代では共通の認識である。ところが、リカードは土地という有限の自然を議論の中心にすえながら、実に巧妙に、有限の自然から無限の商品を生みだす経済理論を構築していく。」⁽⁷⁾

氏は、自然は有限と言われるがあらゆる自然が有限であるわけではない。鉱物的自然は有限であるが、動物的自然や植物的自然は、適切に取り扱えば、「無限に」再生産しう

る。また、リカードの「無制限に増加することができる」という叙述についても、「珍しい彫像や絵画、稀覯書や古銭」等との比較において言っているのであって自然が有限か無限かというほどの大きな問題ではないのである。しかし、そうはいつでも氏は、リカードは「無制限に増加することができる」と言っているのではないか、これは結局「自然を無限ととらえる」ことではないかと主張されるであろうから、リカードはそういうことは主張していないということを述べておかなければならない。

氏は、「いくら労働を投入しても有限な地上の自然から有限の商品しか生産できない」と述べているが、しかし労働は「有限」であり、「いくら」でもそれを「投入」することはできない。ところが氏は、無限の労働の投入を前提してリカードを批判しているのである。もちろんリカードは、氏と異なって労働が「有限」であることを知っている。したがって、有限な労働によって獲得される商品もまた有限である。氏は、「人間は自然の一部」⁽⁸⁾と言われている。ならば、人間の労働も「有限の自然の一部」である。かくして、われわれも次のように言うことができる。リカードは、労働という「有限な自然を議論の中心にすえながら」その主張を展開しているのに、中村氏は「実に巧妙に」労働をあたかも「有限な自然」ではないかのように取り扱い、無限の労働の投入を前提してリカード批判を「構築していく」のである、と。

ところで、中村氏の批判とは別に、労働さえ投入すれば、財貨を「ほとんど無制限に増加することができる」というリカード主張は、今日どのように評価されるべきであろうか。リカードの『原理』が出版されてから190年が経過する。この間、戦争や不況、恐慌によって財貨の生産量が減少したことも度々生じたが、しかし、基本的な傾向はリカードの言うとおりにまさしく「無制限に」財貨の生産量を増加させてきたのではなかろうか。リカード以降190年間の資本主義の歴史は、リカードの見解の正しさを実証したのである。

リカードは資本主義的生産の本質を的確に表現したのである。責められるべきはリカードにあるのではなく、資本主義的生産そのものにあるのである。リカードは資本主義的生産の正確な翻訳者、解説者と言うべきであろう。「ローマ・クラブ」が「成長の限界」と題する報告書を出したのが1972年である。しかし、それ以降も成長は止むことなく続いている。「地上の有限な自然のうえでは、商品もまた有限であることは共通の認識となっている」今日においても、財貨の生産量は「無制限に増加」し続けている。今のままの消費量が続けば、それ程遠くない将来に石油が枯渇してしまうということは誰でも知っている。にもかかわらず、石油消費量は毎年増大し続けている。先進国などに対

して温室効果ガスの削減を義務付けた京都議定書も、その達成が危ぶまれている。最大の温室効果ガス排出国アメリカは、経済成長に支障を来すという理由でこの協定から離脱している。地球温暖化がますます深刻な問題となってきたにもかかわらず、各国は相変わらず成長を競っているのである。自然が有限であろうが無限であろうが、地球環境がどうなろうが、資本は価値増殖をやめることができず、無制限に富の増大を続けなければならないのである。だから、自然を有限と認識するか無限と認識するかは財貨の「無制限の増加」とは関わりのないことである。

マルクスは、労働時間の著しい延長が労働者の発育不全、健康の破壊、寿命の短縮をもたらし、それらがひいては資本の搾取材料である労働人口の枯渇をもたらすことを資本は十分に知っているにもかかわらず、彼らが労働時間の延長をやめられない理由について次のように述べている。

「どんな株式投機の場合でも、いつかは雷が落ちるにちがいないということは、だれでも知っているのであるが、しかし、だれもが望んでいるのは、自分が黄金の雨を受けとめて安全な所に運んでから雷が隣人の頭に落ちるということである。われ亡きあとに洪水はきたれ！ [Apres moi le deluge!]これが、すべての資本家、すべての資本家国の標語なのである。だから、資本は、労働者の健康や寿命には、社会によって顧慮を強制されないかぎり、顧慮を払わないのである。肉体的および精神的な萎縮や早死にや過度労働の責め苦についての苦情にたいしては、資本は次のように答える。この苦しみはわれわれの楽しみ（利潤）を増やすのに、どうしてそれがわれわれを苦しめるというのか？ と。しかし、一般的に言って、これもまた個々の資本家の意志の善悪によることではない。自由競争が資本主義的生産の内在的な諸法則を個々の資本家にたいしては外的な強制法則として作用させるのである。」⁽⁹⁾

ここでマルクスが述べていることは、そのまま環境問題についても当てはまる。資本は、環境問題に対しても京都議定書（非常に緩やかな規制でしかないが）のような方法で「社会によって顧慮を強制されないかぎり、顧慮を払わないのである。」

（４）「スミスからリカードへの自然観の変化」について

中村氏は、スミスはリカードとは対照的に「自然を有限とみなし、その生産物も有限とした」と主張する。その根拠になっているのは、次のスミスの文章である。「生産的労働者も、不生産的労働者も、さらには全然労働しない人々も、その国の土地と労働の年々の生産物によって等しく扶養されている。この生産物はたとえそれがどれほど大である

うとも、けっして無限ではありえず、かならず一定の限界をもっているにちがいない。』⁽¹⁰⁾しかし、見られるように、スミスは生産物が無限ではないということを述べているだけであって自然が有限であるか、無限であるかということについては一言も述べていない。にもかかわらず、中村氏はスミスのこの文章からたちまち「リカードとは対照的に、スミスは自然が有限であり、それゆえ生産物も有限であることを彼の経済理論のなかで明かにする。』⁽¹¹⁾と導き出してくるのである。また氏は、リカードが無限の自然を前提したと主張するとき、その根拠は「労働によって獲得される」生産物は「ほとんど無制限に増加することができるであろう」というリカードの文章であった。しかし、「無制限に増加することができる」ということと、スミスの「この生産物はたとえそれがどれほど大であろうとも、けっして無限ではありえず、かならず一定の限界をもっているにちがいない。」という主張はけっして矛盾するものではない。「一生懸命働けば無限にお金を増やすことができる」ということと、「私がつ持っているお金どれほど大であっても無限ではありえない」ということとが矛盾するものではないということは中学生にもわかることである。しかし氏は、スミスとリカードを無理矢理対立させ、次のように言うのである。「後の経済学はスミスとリカードにたいして同じ古典経済学という評価を与えているが、二つの経済理論における自然観は大きくちがう。そして、この自然観のちがいが、その理論に大きな影響を与えている。』⁽¹²⁾そこで二人の「自然観の違い」が、二人の理論にどのような影響を与えたのか見ていくことにしよう。中村氏は次のように述べられる。

「スミスはリカードにさきがけて人間の労働だけが価値をうみだすという労働価値説を論じたが、一方で、自然もまた働くと論じていた。

『農業では自然もまた人間とともに労働する。しかし製造業では自然は何もせず、人間がすべてをおこなう。』

人間の労働だけが価値をうみだすという労働価値説を論じながら、農業では自然もまた労働すると言えば、それは矛盾する。

たしかに、スミスが指摘するように商品の生産過程は農業と工業では大きくちがう。農業の場合、作物の種子を蒔き収穫するまでの間、人間の労働が必要であるとしても、作物を育て実らせる大きな要因は自然の働きである。一方、工場では原料から商品になるまでの間、自然はいっさい働かず、すべて人間の労働だけが投入される。』⁽¹³⁾

続いて氏はリカードの次の文章を引用される。

「製造業では、自然は人間にたいして無為であるか？われわれの機械を動かし、航海

を助ける風や水の力は、なにものでもないのか？それによってわれわれが、もっとも巨大な機関を運転することができる、気圧や蒸気張力——それらは自然の贈物ではないのか？ましてや、金属を柔軟にしたり溶解したりする熱素の効果や、染色および醗酵の過程における大気の分解の効果においてをや。自然が人間に援助を与えない、しかもまたそれを寛大にかつ無償で与えない製造業を、挙げることはできない」⁽¹⁴⁾

リカードは農業では自然が働くというスミスに反論して製造業においても自然が働いていることを主張するのであるが、氏はこれについて次のように批判される。

「自然の働きが無限であれば、その使用に対して何の代償も払う必要はない。」⁽¹⁵⁾

「しかし、リカードが例としてあげた無限の自然としての蒸気や熱素などは石炭や石油という化石燃料の産物である。それらは、有限な化石燃料に依存する有限な自然の働きである。」⁽¹⁶⁾

見られるように、氏は、リカードが自然の働きを「無限」と捉えているとしてリカードを批判されているが、しかしリカードはそれが「無償」であるとは言っているが「無限」であるとは一言も言っていない。さらに、氏は「自然の働きが無限であれば、その使用に対して何の代償も払う必要はない。」と述べられるが、自然の働きが有限であろうが無限であろうが、その働きに対して何の代償も払う必要はないのである。それとも氏は有限であれば、その働きに対して代償を支払わなければならないと考えていられるのであろうか。例えば、石炭で蒸気機関を動かす場合、石炭や蒸気機関には代償を支払わなければならないが、蒸気的作用には一銭も支払う必要はないのである。それは、味噌や酒を作る場合に、麴的作用に一銭も支払う必要がないのと同じである。また、氏はスミスにしたがって「工場では原料から商品になるまでの間、自然はいっさい働かず、すべて人間の労働だけが投入される。」(傍点一原田)と述べながら、工場で使われる「蒸気や熱素」などについて「それらは、有限な化石燃料に依存する有限な自然の働きである。」(傍点一原田)と言う。氏は論理的思考力に難点があるためにこの二つの文章が矛盾していることに気づかれないのである。氏はまた、リカードが「醗酵 (fermentation)」も例にあげていることを無視され、「蒸気や熱素」のみを取り上げリカードを批判される。私は、氏に一度味噌「工場」かビール「工場」を見学することをお勧めする。そうすれば、「有限な化石燃料に依存」しない「自然の働き」を知ることができるであろう。

マルクスは、「労働者は、いろいろな物の機械的、物理的、科学的な性質を利用して、それらのものを、彼の目的に応じて、ほかのいろいろな物にたいする力手段として作用させる。」⁽¹⁷⁾と述べ、そしてここに注を付けてヘーゲルから次の引用をしている。「理性は

有力であるとともに狡知に富んでいる。その狡知がどういう点にあるかと言えば、それは、自分は過程にはいりこまないで、もろもろの客体をそれらの本性にしたがって相互に作用させ働き疲れさせて、しかもただ自分の目的だけを実現するという、媒介的活動にある。」⁽¹⁸⁾

「もろもろの客体をそれらの本性にしたがって相互に作用させ働き疲れさせ」というのは、もろもろの自然素材を「それらの本性にしたがって相互に作用させ働き疲れさせ」ということに他ならない。生産とは自然の性質あるいは自然の法則の利用であり、したがって「自然はいっさい働か」ない生産などありえないのである。

中村氏は、農業では、自然も働くというスミスの誤った主張を根拠にさらに次のように言う。

「有限な自然のうえでは、自然の生産力は限られている。そこで、農業労働によって自然を豊かにし自然の生産力を高めることで、経済的価値だけでなく物質的にも豊かになり人間社会が豊かになる。工業では自然は消費され加工されて貧しくなる一方であった。しかし、農業では労働によって自然はますます豊かになり、国も豊かになる、とスミスはいう。」⁽¹⁹⁾

これまで度々経験してきたように、氏は根拠のない見解を自信たっぷりに述べることを得意とされるのであるが、ここでもその例にもれない。「スミスはいう」と言うが、どこで言っているかをまったく示してくれないのである。

スミスが一国の豊かさを国民一人あたりが消費する生産物量で表し、そして豊かさを規定する最も重要な事情として労働の生産力を挙げ、さらに労働の生産力の発展が分業によって促進されると主張していることは人口に膾炙している。スミスは、その分業について次のように述べている。「農業に従事する労働のさまざまな部門のすべてを、完全にあますところなく分化してしまうのは不可能だということが、おそらくは農芸の労働における生産諸力の改善が、なぜもろもろの製造業のそれと必ずしもつねに歩調をあわせることができなかつたか、ということの根拠であろう。実際のところ、もっとも富裕な諸国民は、農業においても製造業においても、一般にそのすべての隣国民をしのいでいるが、かれらは前者よりも後者の優越性によっていっそう他をひきはなすのがふつうである。」⁽²⁰⁾

見られるように、スミスは、中村氏の主張とは正反対のことを述べているのである。竹本氏は「『福祉』を経済的側面に限定して、つまり経済的意味での福祉を生活必需品や便益品の豊富さと捉え、その福祉の水準を国民の平均消費量」で評価する「平均主義」と

「富裕や貧困を人間が消費する財貨の量によって捕捉する物量主義」、「この二つの理念は今日にいたるまでわれわれの経済的思考を深くとらえているものであって、その意味でも『国富論』は経済学のとば口に立つ書だといえる」⁽²¹⁾と述べている。正しい指摘だと思われる。今日の成長至上主義経済学はスミスに淵源すると言うことができる。

これまでの検討を通じて言えることは、スミスにもリカードにも取り立てて「自然観」というほどのものは存在せず、したがって「スミスからリカードへの自然観の変化」も存在しないということである。⁽²²⁾

(5) 「生産的労働と不生産的労働」について

氏は、次のように述べる。「スミスは有限な商品を論じる際に、同時に労働の質を論じた。生産的労働と不生産的労働である。……（中略）……例えば、工場の労働者は、加工する材料の価値に、自分自身の生活費と資本家の利潤の価値を付加する生産的労働をおこなっている。ところが、召使いの労働は、労働ゆえに価値をうみだすが、消費するだけであとにはなにものこすことがない。

無限な自然のうえでの無限の商品であれば問題にならなかったことだが、有限な自然のうえでの有限の商品では、自然や労働は有効に活用されなければならない。それゆえ不生産的労働はなるべく減少させ、生産的労働を増やさなければならない、とスミスはいう。」⁽²³⁾

「無限な自然のうえでの無限な商品であれば」「自然や労働は有効に活用」されなくてもよいのだろうか。氏にしたがえば、リカードは「無限な自然を仮説とした」⁽²⁴⁾のであるから、「自然や労働の有効な活用」などまったく関心はなかったということになるが、それでよいのだろうか。リカードを有名にした「比較生産費説」は、国際間における「自然や労働の有効な活用」方法を提起したのではないのか。もちろん、それが実際に「自然や労働の有効な活用」になるかどうかは、また別の問題であるが。

次に「有限な自然のうえでの有限の商品では、自然や労働は有効に活用されなければならない。それゆえ不生産的労働はなるべく減少させ、生産的労働を増やさなければならない」という主張は正しいであろうか。生産的労働と不生産的労働の区別は「自然や労働の有効な活用」と関係があるのであろうか。まず、生産的労働と不生産的労働についてのスミスの説明を見てみよう。スミスは次のように述べている。

「労働には、それが加えられる対象の価値を増加させる部類のものと、このような結果を全然生まない別の部類のものがある。前者は、価値を生産するのであるから、こ

れを生産的労働 (productive labour) と呼び、後者はこれを不生産的労働 (unproductive labour) と呼んでさしつかえない。こういうわけで、製造工の労働は、一般に、自分が加工する材料の価値に、自分自身の生活維持費の価値と、自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反して、召使いの労働はどのような価値も付加しない。なるほど、製造工は、自分の賃銀を自分の親方からまえ貸ししてもらってはいるけれども、こういう賃銀の価値は、一般に、自分が労働を加えた対象の増大した価値のうち利潤をともなって回収されるのであるから、実は主人にはなんの費用もかからない。ところが、召使いの生活維持費はけっして回収されないのである。人は多数の製造工を使用することによって富み、多数の召使いを扶養することによってまずくなる。」⁽²⁵⁾

中村氏はスミスを解説されて「召使いの労働は、労働ゆえに価値をうみだす」と言われるが、しかしスミス自身は「召使いの労働はどのような価値も付加しない。」と述べているのである。だが、これは措くとしよう。見られるように、ここに示されている生産的労働と不生産的労働の区別は、雇用者に利潤を生産するかどうかということである。スミスは人を雇用することによって金が儲かる場合とそうでない場合があるということ主張をしているのである。例えば、自動車の運転という同じ労働でも、タクシー会社に雇用されている労働者は雇用主に利潤を生産するから生産的労働者である。しかし、金持ちに雇われてゴルフや宴会のお供をするお抱え運転手は雇用主に利潤をもたらさないから不生産的労働者である。前者は資本と交換される労働であり、後者は収入と交換される労働である。だから、生産的労働、不生産的労働の区別は「自然や労働の有効な活用」とはいかなる関係もないのである。

(6) 貨幣は「人間の道具」か

氏は、「従来の経済学」を次のように批判される。

「従来の経済学は人間の存在を労働力商品としてとらえ、評価してきた。労働力商品としての人間は、価値の獲得のためには、ためらわずに自然を破壊してきた。価値の獲得のためには、ためらわずに未来から奪ってきた。現時点でお金をたくさん稼ぐことが労働者として成功すること、という評価が経済学によっておこなわれてきたからだ。そしてそのような評価基準を内在するものとして経済社会が存在していた。

経済学的な価値とは実質的には貨幣、お金を意味する。人間の道具であるお金に対して経済学は『価値』という重要な言葉を与えてきた。

経済学的な価値から離れれば、自然を豊かにする労働も、他人の苦しみを救う労働も

価値あるものと評価することができる。しかし、経済学ではその労働がお金にならなければ評価しない。逆に、お金にさえなれば、どのような質の労働がおこなわれていてもまったく関知しない。そのような経済学であり、経済社会であったからこそ、自然問題が必然的に引き起こされてきたのである。』⁽²⁶⁾

あまりにも滅茶苦茶なことが言われているので、その滅茶苦茶をどこから指摘していくか苦慮するのであるが、順番に冒頭の文章から見ていくことにしよう。「労働力」や「労働力商品」という概念について少しでも知識のある者であれば、それがマルクスに固有の概念であり、マルクスを除いては「従来の経済学」に「労働力」や「労働力商品」という概念は存在しないということは知っている。だから、「人間の存在を労働力商品としてとらえ、評価してきた。」ということを主張する者がいるとすれば、マルクス以外には考えられない。しかし、マルクスがかかる主張をするはずがないということも明かである。資本主義社会はさまざまな「人間」から構成されており、労働力を商品として売る必要のない人間もたくさんいるのである。だから「人間の存在」をすべて「労働力商品としてとらえる」ことなどありえないのである。次に、「評価してきた」とはどういうことだろうか。氏は、続いて「現時点でお金をたくさん稼ぐことが労働者として成功すること、という評価が経済学によっておこなわれてきた」と述べられているから、このように「評価してきた」ということであろう。「労働力商品」についてのこのような「評価」がマルクスとは全然関わりがないということは改めて述べるまでもないことであるが、しかし念のためマルクスが「労働力商品」をどのように「評価」していたかを示しておこう。マルクスはそれについて次のように述べている。

「貨幣所有者および商品所有者によって代表される対象化された労働・資本家としての労働能力に対立して人格化されている価値・にたいして、自分の労働能力そのものを商品として売りに出さねばならぬ労働者、という自立的な姿で、特有の要因として相対することができる、そういう労働能力は、自分の労働手段を奪われた労働能力である。現実の労働は人間の諸欲望の充足のために自然的なものを取得する [わが物とする] ことであり、人間と自然とのあいだの素材変換 [新陳代謝] を媒介する活動であるから、労働能力は、労働手段、すなわち労働による自然的なものの取得の对象的諸条件を奪われることによって、同様に生活手段も奪われる。…… (中略) …… したがって、労働手段および生活手段を奪われた労働能力は絶対的貧困そのものであり、また労働者は、そのような労働能力の単なる人格化として、現実には自分の諸欲望を、他方それらを充足するための活動は、ただ、対象をもたない・自分自身の主体性のなかに包み込まれた

・素質（可能性）としてもっているにすぎない。労働者はそのようなものとして、その概念からして貧民であり、自分の対象性から孤立化され切り離されたこの能力の人格化および担い手として貧民である。」⁽²⁷⁾

以上によって、氏が「従来の経済学」について何も知られないでいい加減な批判をされていることが明らかにされたはずであるが、続く文章も「経済学」と「経済社会」の関係について転倒した理解しか持ち合わせていないことを暴露している。氏は、労働者が「ためらわずに自然を破壊してきた」原因を、「現時点でお金をたくさん稼ぐことが労働者として成功すること、という評価が経済学によっておこなわれてきたからだ。そしてそのような評価基準を内在するものとして経済社会が存在していた。」ことに求める。「お金をたくさん稼ぐことが」「成功」の基準であるのは労働者に限ったことではない。投資家、経営者、医者、弁護士、小説家、スポーツ選手、この社会ではほとんどの職業が「お金をたくさん稼ぐことが」「成功」の基準となっているのではないだろうか。「お金をたくさん稼ぐこと」を機軸に組み立てられている社会、それが資本主義社会である。資本は「お金をたくさん稼ぐ」ことを使命としており、「労働力商品」は資本に雇用され、資本として機能する。だから、「価値の獲得のためには、ためらわずに自然を破壊してきた」のは資本であり、労働者は資本が獲得した価値のうちほんの一部をうけとるにすぎない。

ところで氏にしたがえば、この社会システム、つまり「お金をたくさん稼ぐこと」が「成功」の基準となる「経済社会」は、経済学によって形成されたかのようなものである。氏は「経済学的な価値を離れば」と言われるが、簡単に「離れ」るわけにはいかないのである。氏は貨幣を「人間の道具」として捉えているようであるが、はたしてそうであろうか。なるほど古典派経済学の代表者アダム・スミスは貨幣を「人間の道具」として捉えた。スミスは貨幣をもっぱら流通手段の形態で捉え、それを「商業の用具」と呼んでいる。今日の経済学の主流も貨幣を「人間の道具」として捉えている。貨幣を「人間の道具」であるという見解を批判し、貨幣の方が主人であり、人間が貨幣の道具となっているということ、言い換えれば、この社会システムのもとでは、人間が価値、貨幣の支配から「離れ」ることができないことを明らかにしたのがマルクスである。⁽²⁸⁾

古典派経済学の大きな功績は商品の価値を分析し、それを労働に還元し、価値の大きさが労働量によって決定されることを明らかにしたことである。しかし、彼らは、なぜ労働が商品の価値という形態をとるのか、言い換えれば、人間の労働が物の価値という不思議な形態をとって表れるのかという問題をまったく不問に付したのである。この問

題を問題として提起し、余すところのない説明を与えたのがマルクスである。

商品生産社会においては、人間の労働はその生きた形態においては私的労働であり、直接的には社会的分業の一環を形成するものではない。それが社会的分業の一環を形成するのは、言い換えれば社会的総労働の一部を構成するのは、価値という形態においてである。価値は人間の労働、抽象的人間労働の結晶に他ならないが、しかしそれは人間から離れて、物自身の価値として独自の運動を展開するのであり、そして逆に人間がこの運動によって制御されることになるのである。マルクスは、これを神が人間の観念の創造物でありながら、人間から離れた独立の存在として人間に関係してくるのになぞらえて「商品の物神性」と呼んだ。マルクスは次のように述べている。「じっさい、労働生産物の価値性格は、それらが価値量として実証されることによってはじめて固まるのである。この価値量のほうは交換者たちの意志や予知や行為にはかかわりなく絶えず変動する。交換者たち自身の社会的運動が彼らにとっては諸物の運動の形態をもつのであって、彼らはこの運動を制御するのではなく、これによって制御されるのである。」⁽²⁹⁾

商品の物神的性格は、貨幣が形成されれば「貨幣の物神的性格」、つまり貨幣による人間支配に発展する。貨幣はどんな商品とも直接に交換可能であり、したがって、「素材的富の物質的代表者」⁽³⁰⁾であるから、致富の対象となる。致富の対象としての貨幣＝蓄蔵貨幣は、その本性上無制限である。貨幣はどんな商品にも変わりうるから質的に無制限である。しかし、一定量の貨幣は一定量の商品にしか変わりえないから量的に制限されている。質的な無制限と量的な制限との矛盾は、貨幣蓄蔵者を際限のない蓄積衝動に駆り立てるのである。さらに、貨幣が資本として機能するようになれば、際限のない貨幣の蓄積衝動は、際限のない資本の蓄積衝動に発展する。「この絶対的な至富衝動、この熱情的な価値追求は、資本家にも貨幣蓄蔵者にも共通であるが、しかし、貨幣蓄蔵者は気の違った資本家でしかないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者なのである。」⁽³¹⁾ さらに、マルクスは、「この熱情的な価値追求」には「限度がない」ことを、次のように指摘している。

「単純な商品流通——買いのための売り——は、流通の外にある最終目的、使用価値の取得、欲望の充足の手段として役だつ。これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖はただこの絶えず更新される運動のなかだけに存在するのだからである。それだから、資本の運動には限度がないのである。

この運動の意識ある担い手として、貨幣所持者は資本家になる。彼の一身、または彼のポケットは、貨幣の出発点であり、帰着点である。あの流通の客観的内容——価値の

増殖——が彼の主観的目的なのであって、ただ抽象的な富をますます多く取得することが彼の操作の唯一の起動的動機であるかぎりでのみ、彼は資本家として、または人格化され意志と意識とを与えられた資本として機能するのである。」⁽³²⁾

資本家は資本の人格化として際限のない価値増殖運動に駆り立てられるのであって、資本家であるかぎりこの運動から「離れ」ることはできない。だから、資本は成長を強制された存在なのである。貨幣による人間支配は資本において、つまり、貨幣の資本としての機能において、完成した姿をとって現れるのである。

(7) マルクス批判について

氏は、次のようにマルクスを批判される。

「一方、経済学では、生産と消費が永遠に続くかのような議論がおこなわれてきた。例えば、マルクスが再生産を論じるとき、単純再生産と拡大再生産の二つの場合にわけて説明している。しかし、ここで論じられているのは経済的価値だけである。単純再生産であっても資源は消費され、廃棄物が発生するので永遠に続けることは不可能である。ましてや拡大再生産では、経済的価値の生産は増大するであろうが、資源の浪費と廃棄物の発生も加速され、生産の停止する時期が早まる。」⁽³³⁾

この文章からすると、どのような生産であれ生産がおこなわれるかぎり、「資源の浪費と廃棄物が発生」し「生産の停止する時期」が必ずやってくる、ということを主張されているようである。ところが、氏は次のようにも述べられている。

「熱力学に依拠する経済学とは、従来の経済学を根本的にすべて否定するものではない。従来の経済学を認めながらも、非可逆的な自然の法則に基づいて、従来の経済学に対して様々な制約と可能性を与えるものである。

例えば、従来の経済学では、経済活動において生産だけがおこなわれるかのような議論をおこなってきた。それゆえ、経済学は、経済活動における自然の破壊をも、単に生産としてしか表現できなかった。しかし、これからは生産には消費や破壊が必ずともなうということを経済学が認識した経済学的議論が必要である。

生産の過程で当然生じる自然の消費や破壊までも視野にいられた経済理論では、生産と破壊が明確に認識される。そのような理論に基づく経済社会では、エネルギー的・物的・エントロピー的に根拠をもつ持続的な社会建設の議論が可能になる。」⁽³⁴⁾

この主張は、先の主張と矛盾していないだろうか。氏は、先に「生産と消費」は「単純再生産であっても資源は消費され、廃棄物が発生するので永遠に続けることは不可能

である。」と述べた。ところが、ここでは「自然の消費や破壊までも視野にいれた経済理論では」、「持続的な社会建設の議論が可能になる。」と主張されるのである。つまり、先には、「生産と消費が永遠に続くかのような議論」そのものが誤りであると主張されているのにたいして、ここでは、「自然の消費や破壊までも視野にいれた経済理論」の立場に立てば「持続的な社会建設」の可能性が生じるというのである。つまり、氏も「エネルギー的・物的・エントロピー的」な問題を考慮に入れて生産をおこなえば、生産と消費が「永遠に続」くことを、言い換えれば「持続的な社会建設」が可能であることを認めているのである。ならば、経済学が批判されるべきは「生産と消費が永遠に続くかのような議論」をしたことにあるのではなく、「生産の過程で当然生じる自然の消費や破壊までも視野にいれ」なかったということにあるはずである。こう考えることによって、氏の主張は論理の一貫したものとなるのである。ところで、経済学はこれまで「生産の過程で当然生じる自然の消費や破壊までも視野にいれ」てこなかったであろうか。現在主流の市場原理主義の経済学については、氏の批判は当たっている。しかし、マルクスについては当たっていない。マルクスは次のように述べている。

「資本主義的生産は、それによって大中心地に集積される都市人口がますます優勢になるにつれて、一方では社会の歴史的動力を集積するが、他方では人間と土地とのあいだの物質代謝を攪乱する。すなわち、人間が食料や衣料の形で消費する土壌成分が土地に帰ることを、つまり土地の豊饒性の持続の永久的自然条件を、破壊する。」⁽³⁵⁾

「都市工業の場合と同様に、現代の農業では労働の生産力の上昇と流動化の増進とは、労働力そのものの荒廃と病弱化とによってあがなわれる。そして、資本主義的農業のどんな進歩も、ただ労働者から略奪するための技術の進歩であるだけではなく、同時に土地から略奪するための技術の進歩でもあり、一定期間の土地の豊度を高めるためのどんな進歩も、同時にこの豊度の不断の源泉を破壊することの進歩である。ある国が、たとえば北アメリカ合衆国のように、その発展の背景としての大工業から出発するならば、その度合いに応じてそれだけこの破壊過程も急速になる。それゆえ、資本主義的生産は、ただ、同時にいっさいの富の源泉を、土地をも労働者をも破壊することによってのみ、社会的生産過程の技術と結合とを発展させるのである。」⁽³⁶⁾

見られるように、マルクスは資本主義的生産が「いっさいの富の源泉を、土地をも労働者をも破壊する」こと、「豊饒性の持続的条件を破壊」すること、「豊度の不断の源泉を破壊する」ことを指摘している。多くのマルクス批判家と同様、氏もマルクスを読まずにマルクスを批判されているのである。⁽³⁷⁾

エンゲルスの次の指摘も、今日環境問題を考えていく上で重要な視点である。

「しかしわれわれは、われわれ人間が自然にたいしてかちえた勝利にあまり得意になりすぎることはやめよう。そうした勝利のたびごとに、自然はわれわれに復讐する。なるほど、どの勝利もはじめはわれわれの予期したとおりの結果をもたらす。しかし、二次的、三次的にはそれはまったく違った、予想もしなかった作用を生じ、それらは往々にして最初の結果を張消しにしてしまうことさえある。」⁽³⁸⁾

「すなわち、われわれが自然を支配するのは、ある征服者がよそのある民族を支配するとか、なにか自然の外にあって自然を支配するといったぐあいに支配するのではなく、——そうではなくてわれわれは肉と血と脳髓ことごとく自然のものであり、自然のただなかにあるのだということ、そして自然にたいするわれわれの支配はすべて、他のあらゆる被造物にもましてわれわれが自然の法則を認識し、それらの法則を正しく適用しうる点にあるのだ、ということである。」⁽³⁹⁾

注

- (1) 中村修 前掲書 1－2頁
- (2) 同上11頁
- (3) 同上25頁
- (4) (5) 同上102頁
- (6) リカード 『経済学および課税の原理』（リカード全集）雄松堂書店 14頁 訳文は原文を示した箇所については、中村氏の採用されている訳にしたがった。
- (7) 中村修 前掲書 104頁
- (8) 同上 232頁
- (9) マルクス 『資本論』（マルクス・エンゲルス全集23巻 a 大月書店）353頁
- (10) スミス『諸国民の富』（岩波文庫 第2巻）340頁
- (11) (12) 中村修 前掲書 114頁
- (13) 同上114－115頁
- (14) リカードウ 前掲書 90頁
- (15) (16) 中村修 前掲書 116頁
- (17) マルクス 『資本論』（前出23巻 a）235頁
- (18) ヘーゲル『小論理学』（松村一人訳 岩波文庫 下巻）204頁
- (19) 中村修 前掲書 119頁

- (20) スミス『諸国民の富』岩波文庫 第1巻 103頁
- (21) 竹本洋 『国富論を読む』 ヴィジョンと現実 名大出版 2005年 2頁
- (22) 「スミスからのリカードへの自然観の変化」を最初に問題にしたのは玉野井氏である。氏は「自然の働き」についての本文で引用したリカードのスミス批判について、次のように述べている。「論争の勝敗はすでに明かである。〈自然〉には二つのカテゴリーがある。たしかにリカードウのいうとおり、工業的生産においても〈自然〉は作用するものであるが、しかしその〈自然〉は、ダヴィッドのことは借りると、『生きた自然』ではない。リカードウは市場と工業の世界に立って、『有機的生産』を『機械的生産』と混同する誤りをおかしている。」(玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』みすず書房 1978年 83頁)
- リカードの批判は、工業では自然は何事もしないが農業では自然が働くのでその分多くの価値を形成するというスミスの主張に対してなされたものである。だから、リカードは工業における自然の働きを例にあげて反論しているのである。ところが玉野井氏は、リカードの主張は「『有機的生産』を『機械的生産』と混同する誤りをおかしている。」とリカードを批判されるのである。問題は工業においても自然が働くかどうかであり、「有機的生産」か「無機的生産」かが問われているのではないから、玉野井氏の批判は的はずれの批判と言わざるをえない。また、リカードが挙げている例がすべて「無機的生産」の例ばかりかというところではなく、すでに見たように「醗酵」も例にあげているのである。氏は「醗酵」も「無機的生産」と考えていられたのであろうか。
- (23) 中村修 前掲書 118頁
- (24) 同上 119頁
- (25) スミス 前掲書 岩波文庫 第2巻 313頁
- (26) 中村修 前掲書 240頁
- (27) マルクス 『資本論草稿集』第4巻 大月書店 57頁
- (28) 貨幣の流通手段としての機能に限るならば、それは交換の不便を取り除いてくれる便利な道具として捉えることもできるが、しかし現在では1日に1兆ドルから2兆ドルの貨幣が外国為替取引に使われており、これは世界全体の貿易額の50倍から100倍の額に相当すると言われていている。この金融取引(マネーゲーム)に使われる貨幣を、中村氏は如何なる「道具」として規定するであろうか。
- (29) マルクス『資本論』(前出23巻 a) 101頁
- (30) マルクス『経済学批判』(マルクス・エンゲルス全集13巻) 104頁
- (31) 『資本論』(全集23巻 a) 200頁

- (32) マルクス 『資本論』（前出23巻 a）198－200頁
- (33) 中村修 前掲書 91－92頁
- (34) 同上 94頁
- (35) マルクス『資本論』（前出23巻 a）656頁
- (36) 同上 657頁
- (37) 武田氏は、中村氏と異なってマルクスを読んでマルクスを批判されているのであるが、しかしその読み方に問題があるのか、次のような矛盾した説明をされている。「しかし、産業化社会はいったいなぜ、必然的に環境破壊的、健康破壊的となるのか。その謎のもっとも根源にあるものは、資本主義経済＝市場経済を成り立たせている価値法則である。
- マルクスは、市場で商品交換を支配しているものが、価値法則であることをはじめて科学的に解明した。このことは、今でも巨大な理論的意義をもっている。」（武田一博『市場社会から共生社会へ』青木書店 1998年 48頁）
- この主張は正しいのであるが、しかし、次のようにも言われる。「こうしてマルクスにとっては技術の発展は人間の進歩の証とはなっても、なんら否定的評価を受けないものなのである。しかしマルクスの、そして今日もマルクス主義者たちが基本的に受け継いでいるこの技術観は、もはや妥当しないものと私は考える。
- というのも、これまですでに述べてきたように、今日の環境危機はまさに技術の高度化がもたらしたものでもあり、技術のいっそうの高度化はさらなる環境危機を進行させるだけでなく、人間の自立的能力の喪失をもたらすからである。」（前出 62頁）
- 二つの文章は矛盾している。もし環境破壊の原因が技術の高度化にあるならば、経済のシステムを変えて価値法則を廃棄しても、そういう技術を廃棄しない限り環境破壊はなくならないであろう。しかし、環境破壊の原因は技術の高度化そのものにあるのではなく、その利用の仕方に、つまりそれが大量生産、大量浪費、大量廃棄につながっていく仕方で行われていることにあるのである。この点については拙稿「現代社会における富の矛盾」『政経研究』第74号を参照
- (38) エンゲルス「猿が人間化するにあたっての労働の役割」（マルクス・エンゲルス全集20巻）491頁
- (39) 同上 492頁

おわりに

マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』で次のように述べている。「ブルジョアの生産

関係と交通諸関係、ブルジョア的所有諸関係、すなわち、このような巨大な生産手段と交通手段を魔法のように忽然と出現させた近代のブルジョア社会は、自分で呼びだした地下の悪霊をもはや制御できなくなった、あの魔法使いに似ている。」マルクスとエンゲルスは「商業恐慌」の発生をもって上のことを記しているのであるが、現在の地球環境の破壊にもそのまま妥当する。否、現在の環境破壊の本質をこれ以上適切に表現する言葉はほかにないであろう。人類がつくり出してきた巨大な生産力が破壊力として作用しているのである。これまで繰り返し述べてきたように資本は成長を強制された存在であるから、市場原理にまかせておけば破壊力はますます大きくなっていく。社会的、法的な規制が必要である。人類は地球的規模で猛威をふるう巨大な生産力を制御していくことの必要性を切実な課題として迫られているのである。